

抑制性シナプス伝達解析. 第 82 回日本薬理学会年会. 横浜, 3月. [J Pharmacol Sci 2009; 109(Suppl. 1): 117P]

- 19) 西 晴久, Pelleg A<sup>1)</sup>, Thile M(Ludwig-Maximilians-Universität), Schulman ES<sup>1)</sup>(Drexel Univ Col of Med). ヒト肺由来肥満細胞の FcεRI 刺激を介したヒスタミン放出に対する細胞外プリンの作用. 第 82 回日本薬理学会年会. 横浜, 3月. [J Pharmacol Sci 2009; 109(Suppl. 1): 204P]
- 20) 池田恵一. 心臓の酸化ストレスおよび炎症ストレスと Urocortin 分泌. 第 82 回日本薬理学会年会. 横浜, 3月. [J Pharmacol Sci 2009; 109(Suppl 1): 169P]

#### IV. 著 書

- 堀 誠治. PK/PD パラメータ. 山口恵三, 戸塚恭一編. Key Word 感染症. 第 2 版. 東京: 先端医学社, 2008. p.238-40.
- 木村直史. 第 1 章 13) 主な臓器(脳, 心, 肺)の循環調節の概説, 14) 血圧調節の機序, 15) 血流の局所調節の機序の概説. 後藤英司, 木村一雄, 小西真人編 循環器系: コア・カリキュラム テキスト. 東京: 文光堂, 2008. p.48-62.
- 堀 誠治. 科学的な抗菌薬の使用法. 社団法人日本化学療法学会抗菌薬化学療法認定医認定制度審議委員会編. 抗菌薬適正使用生涯教育テキスト. 東京: 社団法人日本化学療法学会, 2008. p.30-41.
- 堀 誠治. 抗菌薬の用法・用量の設定. 木津純子編. これからの薬剤師: からだの科学増刊. 東京: 日本評論社, 2009. p.105.
- 堀 誠治. 薬の安全性と薬剤師. 木津純子編. これからの薬剤師: からだの科学増刊. 東京: 日本評論社, 2009. p.176-9.

#### V. その他

- 木村直史. 薬物と看護. 看護学入門: 2 巻: 食生活と栄養・薬物と看護. 2009 年版. 木村直史, 阿部好文. 東京. メヂカルフレンド社, 2008. p.81-226.

## 病 理 学 講 座

- |                                |                             |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 教 授: 羽野 寛                      | 人体病理学: 特に肺・肝の臓器病理学          |
| 教 授: 山口 裕<br>(病院病理部に outward)  | 人体病理学: 特に腎・泌尿器の病理, 移植臓器の病理  |
| 教 授: 福永 眞治<br>(病院病理部に outward) | 人体病理学: 特に軟部腫瘍・産婦人科の病理       |
| 准教授: 酒田 昭彦<br>(病院病理部に outward) | 人体病理学: 特に肺・心の病理             |
| 准教授: 鈴木 正章                     | 人体病理学: 特に泌尿生殖器・腎細胞癌・乳癌の病理   |
| 准教授: 池上 雅博<br>(病院病理部に outward) | 人体病理学: 特に消化管の病理             |
| 講 師: 千葉 諭                      | 人体病理学: 特に肝・骨髄・循環・脾・胎生形態学の病理 |
| 講 師: 菊地 泰                      | 実験病理学および分子病理学: 特に腫瘍学        |
| 講 師: 二階堂 孝<br>(病院病理部に outward) | 人体病理学: 特に骨軟部腫瘍・リンパ節の病理診断学   |
| 講 師: 鷹橋 浩幸                     | 泌尿生殖器の分子病理学と診断学             |
| 講 師: 清川 貴子                     | 外科病理学: 特に婦人科の病理, 細胞診断学      |
| 講 師: 野村 浩一<br>(病院病理部に outward) | 外科病理学: 特に婦人科の病理             |
| 講 師: 金網友木子<br>(病院病理部に outward) | 人体病理学: 特に腎組織病理              |
| 講 師: 原田 徹<br>(病院病理部に outward)  | 人体病理学: 特に肺腫瘍, 臓器の基本構築       |

## 教育・研究概要

### I. 肝臓に関する研究

1. これまでの研究結果から, 慢性肝炎から肝硬変に至る肝小葉の改築過程は, 正常の安定構造から, 傷害により構造の不安定化が生じ, そこより安定化を求め再生結節形成に行き着いたと考えられる。生物という熱力学的非平衡系における, 「自己形成」から捉えられる事がわかった。

2. ヒト肝の光顕ブロックから連続切片を作成し, その再構築の観察から, アルコール性肝炎から肝硬変に至る形態変容を理解するには, 機軸として正常肝の正確な認識を要する。動脈系の検索を終え, 現在は肝リンパ管を追求している。

3. 解剖例を用いた肝臓組織の胆管の経年変化の

消長についてポイントカウンティングを用いて検討した。

## II. 腎に関する研究

1. 腎細胞癌：腎癌取扱規約にそって所見をとり、症例の集積をしている。特に規約の stage 分類に変更があったので、今までの症例の再評価を行っている。

2. 腎尿管進行性病変：過形成・異形成・腺腫例が教室に約 150 病変ファイルされている。これらの臨床病理学的・組織学的検討を行った。

3. 腎臓の炎症性偽腫瘍症例を経験した。形質細胞浸潤を伴う肉芽，巨細胞性肉芽腫からなり，真菌，抗酸菌を検出した。また，IgG4 陽性細胞の増加がみられた。

4. 我が国での後向き多施設共同研究：全国大学病院，腎専門施設を中心とした厚生労働科学研究費進行性腎障害に関する調査研究班を母体とし，内科・小児科 287 症例を対象に解析した。臨床と病情報の相関性ならびに各病変の臨床予後への影響を後向きに統計解析し，IgA 腎症を構成する病理パラメータの予後予測因子としての役割に関する実証的なデータを出すことにより，エビデンスに基づく組織学的重症度分類を完成させた。

5. IgA 腎症国際組織分類委員会の成果：世界各国から収集された総計 265 症例を，18 人の腎病理医が診断しその臨床病情報を解析した結果が 2008 年の第 2 回国際組織分類委員会で検討された。このエビデンスに基づいた IgA 腎症の組織学的分類が誌上発表される。

6. 政策医療ネットワーク共同研究：腎疾患治療指針に役立つ病理診断基準作成とその腎ネットワーク内での標準化についての研究。政策医療腎ネットワークにより，過去 4 年間にわたり 1,600 件の腎生検ガラス標本と臨床情報が送付され，腎病理専門医による確認のもとに臨床・病情報が共通の基準で蓄積された。これを基盤に，腎生検からみた各種腎疾患の全国縦断的頻度分布，年代別分布，臨床診断と病因・病型病理診断との対応，慢性腎臓病 (CKD) 病期の頻度，層別化蛋白尿頻度について，我が国の腎生検病理診断統計に関する具体的な数値を得ることができた。

7. 妊娠高血圧性腎症：19 例の組織学的解析で血栓性微小血管症や巣状糸球体硬化症がみられ，髓放線部障害を伴い，腎血管性高血圧症との関連が示唆された。

8. 腎臓に発生する希な軟部腫瘍 (腎の angio-

sarcoma, 腎の pigmented perivascular epithelioid cell tumor) について詳細に検討した。

## III. 消化管に関する研究

食道：外科的に切除された食道表在癌を用いて，食道表在癌におけるリンパ節転移の危険因子について検索した。特に脈管侵襲を特殊染色により，正確に同定したことが特色である。他の因子と共に多変量解析を行った結果，リンパ節転移と最も関係の深かった因子は，大腸癌と同様脈管侵襲であった。

## IV. 産婦人科に関する研究

1. 卵巣の経年性変化：組織計測的手法を用いて卵巣の経年性変化について検討した。卵巣は 30 歳以後から萎縮を始め，閉経期以後高度の萎縮を示し，萎縮の本体は髓質であることを明らかにした。

2. Ovarian atypical endometriosis と malignant ovarian tumor との関係について，また子宮の cotyledonoid dissecting leiomyoma について臨床病理学的検討を行った。

## V. 泌尿生殖器に関する研究

前立腺癌に関する臨床病理学的研究では，これまでの研究結果をまとめ，総説を主とする論文にまとめた。分子病理学的研究では，微小前立腺癌から臨床癌さらには転移癌へと進展する過程での染色体 LOH 解析を行い，包括的な結論を得た。

## VI. 呼吸器に関する研究

1956～2005 年に蓄積された 787 例の肺癌剖検症例を用い，原発性肺癌の臓器転移の実態を解明するべく解析を行った。現在，肺癌においては化学療法適応評価が，診断業務上日常化しつつある。アジア・女性・非喫煙者・腺癌に対して，イレッサ (ゲフニチブ) の効果が証明されつつあり，その際 EGFR 遺伝子の検索が重要となっている。これに対する準備を検討中である。

## VII. その他

1. 「相変化ナノ液滴を用いる超音波診断・治療統合システム」の NEDO 研究班において安全性，治療効果に使用された実験動物の (ネズミ，ウサギ) の組織学的評価を行った。ナノ滴を投与し，治療用超音波を照射した肝臓には，軽度から高度までの 4 段階の傷害がみられることを明らかにした。

2. 癌の発生・進展に関連する責任遺伝子の検索：癌の発生・進展に関連する責任癌抑制遺伝子を検索

する目的で、実際に人体内に発生した肝臓や肝臓組織を対象とし、顕微鏡下で癌部、非癌部組織細胞との違いを形態学的に観察する。そして、分子生物学的手法により、癌細胞と正常細胞の間に染色体上或いは遺伝子上の違いを比較検討することで、関連遺伝子を見出すことが可能と考え検索解析を行っている。

### 「点検・評価」

スタッフおよび基本的業務：業務は教育、研究、診断業務である。講座は主として教育、病院病理部は主として病理診断業務を担っているが、この基本的役割分担は変わらない。平成20年4月時点で、講座から本院病理部に助教1人、分院病理部から講座に講師1人、助教1人、本院病理部から分院病理部に助教1人、出張病院から分院病理部に講師1人が、それぞれ異動した。この結果平成20年度の病理学講座は、教授1人、准教授1人、講師4人、助教2人、本院病理部は准教授1人、講師2人、助教2人のスタッフでスタートした。分院病理部の陣容は昨年度と同様であった。その後平成20年1月に講座の講師1人が、および3月に病院病理部の講師1人が退職した。病理部、講座ともに欠員を生じている状態であるが、そのため昨年度から引き続き講座のスタッフが本院病理部に診断業務のバックアップに入り、土曜日も3週に1回講座が担当し応援している。昨年度のからの病理医不足が解決されないうまに推移しているという状態である。これは病理医を希望する新人医師が少ないためであり、全国的な傾向で私どもだけの特殊事情ではないことは昨年度も記した。幸いなことに2年目の初期研修医一人が入局を希望して、病院病理部で研修を行ったことは大きな希望である。

教育：基本的に昨年度と変わらない。座講については、3年生コース臨床基礎医学Ⅰ、4年生コース臨床医学Ⅰを中心に病理学関連科目の講義が行われた。前者では主に病因病態、炎症、代謝、腫瘍などのユニットで病理学を教え、疾病の基本的成り立ちについて理解してもらう様に努めた。臨床医学Ⅰは臓器別疾患となるが、各ユニット内で、疾患の病理学的側面について講義した。多くのユニットに参加しており、病理に課せられた責務を果たしている。演習、実習関係では大きなものとして、3年ユニット病理学総論実習、4年ユニット病理学各論実習がある。3年生については週1回、4月―7月と昨年度と変わらなかったが、後者についてはコマ数が23回から19回に大幅に減少、5月にスタートし11

月に終了した。このコマ数の減少に対しては実習対象疾患を代表的なものに絞りこむことで対応したが、皮膚病理などは割愛せざるを得なかった。実習形式に関しては従来の形式を踏襲、本年も学生をグループ分けして指導する方式を採った。昨年度から導入したスケッチを毎回回収しその都度評価するという形式によって、ややもすると雰囲気は緩みがちとなる実習に、適度な緊張感を持たらすという良い効果が得られた。その他、3年症候学演習、研究室配属、選択実習にも参加した。選択実習では4フェーズに亘って学生がきており、例年通りにKursusを中心に行われた。CPCについては、本年度より研修医を対象とするCPCに学生が参加するという形式が変わっており、3年生から6年生までが参加している。

病理診断業務および病理解剖：病院病理部では、病院から発生するこれらの業務を毎日行って、年々回答に対する要求度が増大する臨床のニーズに応えている。前述のように人員不足の中で病理部、講座の皆が協力して、大過なく業務が進められてきたことは評価されて良い。講座でも教室員が分担して委託研究の病理診断業務を行っている。病理解剖の数は100体を下回って大分経つが、回復の傾向は見られない。病理解剖の重要性を鑑みるに臨床医、特に指導者の奮起を促したい。なお医療関連死に関するモデル事業関連の解剖も行われた。

研究：病理学講座・病院病理部は、本学の伝統である人体病理を中心に研究活動を行っており、適宜分子病理も取り入れている。診断業務や教育などの日常業務に時間がとられその分研究時間が圧迫されるということが常態化しつつあることに本年も変わりがなかった。時間をかけてじっくり取り組む基礎的研究をするのが容易でなくなっている。日常業務と研究のバランスがうまく取れるようにするためには、如何に優れた病理医を育成するかに掛っている。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) Nagastuma K, Hayashi Y (Kochi Univ), Hano H, Sagara H (Tokyo Univ), Murakami K (Tohoku Welfare Pension Hosp), Saito M (National Institute of Infectious Diseases), Masaki T, Lu T, Tanaka M, Enzan H (Chikamori Hosp), Aizawa Y, Tajiri H, Matsuura T. Lecithin: retinol acyltransferase protein is distributed in both hepatic stellate cell and endothelial cells of normal rodent and human

- liver. *Liver Int* 2009; 29(1): 47-54.
- 2) Wakui S<sup>1)</sup>, Muto T<sup>1)</sup>, Kobayashi Y<sup>1)</sup>, Ishida K<sup>1)</sup>, Nakano M, Takahashi H, Suzuki Y<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Azabu Univ) Furusato M, Hano H. Sertoli-Leydig cell tumor of the testis in a sprague-dawley rat. *J Am Assoc Lab Anim* 2008; 47(6): 67-70.
  - 3) Omi H Okamoto A, Nikaido T, Urashima M, Kawaguchi R, Umehara N, Sugiura K, Saito M, Kiyono T, Tanaka T. Establishment of an immortalized human extravillous trophoblast cell line by retroviral infection of E6/E7/hTERT and its transcriptional profile during hypoxia and reoxygenation. *Int J Mol Med* 2009; 23(2): 229-36.
  - 4) Kanetsuna Y, Horita S<sup>1)</sup>, Tanabe K<sup>1)</sup>, Teraoka S<sup>1)</sup>, Hattori M<sup>1)</sup>, Toki D<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. Is patchy tubular injury a histopathological marker of acute rejection? *Clin Transplant* 2008; 22(Suppl. 19): 13-8.
  - 5) Kushima M<sup>1)</sup>, Akita H<sup>1)</sup>, Ota H<sup>1)</sup>, Masuda S<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Showa Univ), Fukunaga M. Benign transitional epithelial(urothelial) cyst of the ovary: proposal of a new entity in the sub-classification of ovarian transitional cell tumor. *Showa Univ J Med Sci* 2008; 20(3): 179-85.
  - 6) Li X<sup>1)</sup>, Ishida H<sup>1)</sup>, Yamaguchi Y, Tanabe K<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ). Poorgraft outcome in recipients with de novo donor-specific anti-HLA antibodies after living related kidney transplantation. *Transpl Int* 2008; 21(12): 1145-52.
  - 7) Saitou M, Isonishi S, Hamada T, Kiyokawa T, Tachibana T, Ishikawa H, Yasuda M. Mitochondrial ultrastructure-associated chemotherapy response in ovarian cancer. *Oncol Rep* 2009; 21(1): 199-204.
  - 8) Shimizu T<sup>1)</sup>, Ishida H<sup>1)</sup>, Shirakawa H<sup>1)</sup>, Omoto K<sup>1)</sup>, Tanabe K<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. Clinical and histological analysis of chronic tacrolimus nephrotoxicity in renal allografts. *Transpl Proc* 2008; 40(7): 2370-2.
  - 9) Aihara H, Sumiyama K, Saito S, Tajiri H, Ikegami M. Numerical analysis of the autofluorescence intensity of neoplastic and non-neoplastic colorectal lesions by using a novel videoendoscopy system. *Gastrointest Endosc* 2009; 69(3): 726-33.
  - 10) Nakano M, Takahashi H, Shiraishi T(Mie Univ), Lu T, Furusato M, Wakui S, Hano H. Prediction of clinically insignificant prostate cancer by detection of allelic imbalance at 6q, 8p and 13q. *Pathol Int* 2008; 58(7): 415-20.
  - 11) Sasajima Y<sup>1)</sup>, Mikami Y(Kyoto Univ), Kaku T<sup>2)</sup>, Kiyokawa T, Ohishi Y<sup>2)</sup>(<sup>2</sup>Kyushu Univ), Hamada T, Sasaki T<sup>3)</sup>, Fujita H<sup>3)</sup>(<sup>3</sup>Hokkaido Cancer Society), Moriya T(Kawasaki Med Univ), Kasamatsu T<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>National Cancer Centre Hosp), Tsuda H(National Med Coll). Gross features of lobular endocervical glandular hyperplasia in comparison with minimal-deviation adenocarcinoma and stage Ib endocervical-type mucinous adenocarcinoma of the uterine cervix. *Histopathology* 2008; 53(4): 487-90.
  - 12) Mikami Y(Kyoto Univ), Kiyokawa T, Sasajima Y(National Cancer Centre Hosp), Teramoto N(Shikoku Cancer Centre), Wakasa T(Osaka Red Cross Hosp), Wakasa K(Osaka City Univ), Hata S(Kawasaki Univ). Reappraisal of synchronous and multifocal mucinous lesions of the female genital tract: a close association with gastric metaplasia. *Histopathology* 2009; 54(2): 184-91.
  - 13) Lu T, Hano H. Deletion at chromosome arms 6q16-22 and 10q22.3-23.1 associated with initiation of prostate cancer. *Prostate Cancer Prostatic Dis* 2008; 11(4): 357-61.
  - 14) Nogi H, Kobayashi T, Tabei I, Kawase K, Toriumi Y, Suzuki M, Morikawa T, Uchida K. The predictive value of PgR and HER-2 for response to primary systemic chemotherapy in inflammatory breast cancer. *Int J Clin Oncol* 2008; 13(4): 340-4.
  - 15) Nogi H, Kobayashi T, Suzuki M, Tabei I, Kawase K, Toriumi Y, Fukushima H, Uchida K. EGFR as paradoxical predictor of chemosensitivity and outcome among triple-negative breast cancer. *Oncol Rep* 2009; 21(2): 413-7.
  - 16) Kinoshita S, Hirano A, Komine K, Kobayashi S, Takeyama H, Uchida K, Morikawa T, Nagase J(Nagase Surg), Sakamoto G(Sakamoto Clin). Primary small-cell neuroendocrine carcinoma of the breast: report of a case. *Surg Today* 2008; 38(8): 734-8.
  - 17) Hayashi T, Kawahara H, Yoshimoto K, Kashiwagi H, Yanaga K, Komine K. Early cystoadenocarcinoma of vermiform appendix simulating submucosal tumor of the cecum. *Int J Surg* 2008; 6(6): e15-7.
  - 18) Toki D<sup>1)</sup>, Ishida H<sup>1)</sup>, Setoguchi K<sup>1)</sup>, Shimizu T<sup>1)</sup>, Omoto K<sup>1)</sup>, Shirakawa H<sup>1)</sup>, Iida S<sup>1)</sup>, Horita S<sup>1)</sup>, Furusawa M<sup>1)</sup>, Ishizuka T<sup>1)</sup>, Yamaguchi Y, Tanabe K<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ). Acute antibody-

- mediated rejection in living ABO-incompatible kidney transplantation: Long-term impact and risk factors. *Am J Transplant* 2009; 9(3): 567-77.
- 19) Taneda S<sup>1)</sup>, Honda K<sup>1)</sup>, Horita S<sup>1)</sup>, Koyama I<sup>1)</sup>, Teraoka S<sup>1)</sup>, Oda H<sup>1)</sup> (Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. Light chain deposition disease after renal transplantation. *Am J Kidney Dis* 2008; 52(3): 621-5.
- 20) Yamamoto I, Horita S<sup>1)</sup>, Takahashi T (Vanderbilt Univ), Kobayashi A, Toki D<sup>1)</sup>, Tanabe K<sup>1)</sup>, Hattori M<sup>1)</sup>, Teraoka S<sup>1)</sup> (Tokyo Women's Med Univ), Aita K<sup>2)</sup>, Nagata M<sup>2)</sup> (Tsukuba Univ), Yamaguchi Y. Caveolin-1 expression is a distinct feature of chronic rejection-induced transplant capillaropathy. *Am J Transplant* 2008; 8(12): 2627-35.
- 21) Ishida H<sup>1)</sup>, Omoto K<sup>1)</sup>, Shimizu T<sup>1)</sup>, Shirakawa H<sup>1)</sup>, Nishida H<sup>1)</sup>, Li X<sup>1)</sup>, Yamaguchi Y, Tanabe K<sup>1)</sup> (Tokyo Women's Med Univ). Usefulness of splenectomy for chronic active antibody-mediated rejection after renal transplantation. *Transpl Int* 2008; 21(6): 602-4.
- 22) Isonishi S, Nishii H, Saitou M, Yasuda M, Kiyokawa T, Fukunaga M, Ishikawa H, Tanaka T. Small cell carcinoma of the ovary: clinical and biological study. *Int J Clin Oncol* 2008; 13(2): 161-5.
- 23) Kamoi S<sup>1)</sup>, Ohaki Y<sup>1)</sup>, Mori O<sup>1)</sup>, Kurose K<sup>1)</sup>, Fukunaga M, Takeshita T<sup>1)</sup> (Nihon Med Univ). Serial histologic observation of endometrial adenocarcinoma treated with high-dose progestin until complete disappearance of carcinomatous foci-review of more than 25 biopsies from five patients. *Int J Gynecol Cancer* 2008; 18(6): 1305-14.
- 24) Hamada T, Kiyokawa T, Nomura K, Hano H. Immunohistochemical analysis of reserve cell-link cells of ovarian mullerian mucinous/mixed epithelial borderline tumor. *Int J Gynecol Pathol* 2008; 27(2): 199-206.
- 25) 山本順啓, 佐々木裕, 下村達也, 車 英俊, 三木健太, 池本 庸, 山崎春城, 中野雅貴, 鷹橋浩幸, 颯川 晋. ホルモン抵抗性前立腺癌の予後予測ノモグラムの有用性の検討. *泌外* 2008; 21(8): 1139-40.
- 26) 城 謙輔. IgA 腎症の病理学的分類(国際分類の基本的考え方も含めて). *日腎会誌* 2008; 50(4): 448-55.
- 27) 梅澤 敬, 池上雅博, 二階堂孝. 慈恵医大病院病理部における環境改善. *診断病理* 2009; 26(1): 1-2.
- 28) 二上敏樹, 斎藤彰一, 田尻久雄, 池上雅博. Narrow Band Imaging (NBI) 拡大観察を用いた大腸腫瘍性病変の異型度・深達度診断能の検討. *日消内視鏡会誌* 2009; 51(1): 10-9.
- 29) 山本 泉, 山口 裕. 【腎移植】 腎移植の検査 腎移植病理. *臨検* 2008; 52(7): 803-7.
- 30) 土岐大介<sup>1)</sup>, 石田英樹<sup>1)</sup>, 堀田 茂<sup>1)</sup>, 清水朋一<sup>1)</sup>, 尾本和也<sup>1)</sup>, 白川浩希<sup>1)</sup>, 瀬戸口誠<sup>1)</sup>, 飯田祥一<sup>1)</sup>, 西田隼人<sup>1)</sup>, 山口 裕, 田邊一成<sup>1)</sup> (東女医大). 腎移植レシピエントにおける低用量リツキシマブの末梢血および脾臓内 B 細胞に対する影響. *今日の移植* 2008; 21(6): 643-8.

## II. 総 説

- 1) Fukunaga M, Takahashi H, Yasuda M. Mesonephric adenocarcinoma of the uterine cervix: a case report with immunohistochemical and ultrastructural studies. *Pathol Res Pract* 2008; 204(9): 671-6.
- 2) 金網友木子, 山口 裕. 【知っておきたい最新の腎移植知識】 移植腎病理 Banff 分類を中心に. *腎と透析* 2008; 65(3): 382-88.
- 3) 鈴木正章, 河上牧夫 (東女医大八千代医療センター), 佐々木学, 鷹橋浩幸, 原田 徹. 【外科病理マニュアル】 私のこだわり・工夫 前立腺全摘出術材料の切り出しおよび報告時の工夫. *病理と臨* 2008; 26(臨増): 398-401.
- 4) 城 謙輔. デンスデポジット病と膜性増殖性糸球体腎炎 II 型. *Nephrol Fronti* 2008; 7(2): 158-61.
- 5) 清川貴子. 卵巣癌の組織学的分化度 (grading) と問題点. *病理と臨* 2008; 26(5): 520-1.
- 6) 池上雅博, 三戸部慈実, 小池裕人, 斎藤彰一, 為我井芳郎 (国立国際医療センター). 【大腸癌の発生・発育進展】 大腸癌の発生・発育進展に関する病理学的解析 組織形態から. *胃と腸* 2008; 43(13): 1947-55.
- 7) 鷹橋浩幸. 【癌の治療効果と病理組織診断】 前立腺癌の各種治療法と病理学的変化. *病理と臨* 2008; 26(5): 473-81.
- 8) 福永真治. 【軟部腫瘍診断 2009】 血管性腫瘍の概念とその多様性. *臨画像* 2009; 25(1): 62-71.
- 9) 羽野 寛. 肝臓の病理形態学: 「小葉の改築」を中心に. *慈恵医大誌* 2009; 124(2): 49-62.
- 10) 清川貴子, 濱田智美. 【外科病理マニュアル】 各論 子宮付属器. *病理と臨* 2008; 26(臨増): 310-4.

## III. 学会発表

- 1) Hano H, Lu T, Chiba S, Nagatsuma K, Inagaki T. Tree-dimensional observation on the evolution of fibrosis in the relatively early-to-mid stage of nonalcoholic steatohepatitis. XXVII International Congress of the International Academy of Pathology. Athens, Oct. [Histopathology 2008; 53(Suppl.

- 1) : 258]
- 2) 千葉 諭, 永妻啓介, 鹿 智恵, 遠藤泰彦, 鈴木正章, 羽野 寛. 腎臓の炎症性偽腫瘍の1例. 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 344]
- 3) 鹿 智恵, 羽野 寛. 肝細胞がんの発生と転移に関連する8p22-23の高頻度欠失と意義. 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 253]
- 4) Lu T, Hano H, Ikegami M. Lack of association between DLC-1 genetis alteration and hepatocarcinogenesis. 67th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association. Nagoya, Oct. [日癌会総会記 2008; 67回 : 141]
- 5) 山口 裕. 腎尿管間質病変の見方, 考え方. 第51回日本腎臓学会総会. 福岡, 5月. [日腎会誌 2008; 50(3) : 249]
- 6) 山口 裕, 金網友木子, 本田一穂(東女医大), 藤井晶子(三井記念病院), 北村博司(国立病院機構千葉東病院), 長田道夫(筑波大), 山中宣昭(東京腎臓研究所). IgG4関連腎症の病理組織学的検討. 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 224]
- 7) 福永眞治. Borderline endometrioid tumor of the ovary. 第29回婦人科病理研究会. 川越, 6月.
- 8) Fukunaga M. Perivascular epithelioid cell tumor(PECOMA) of soft tissue. XXVII International Congress of the International Academy of Pathology. Athena, Oct. [Mod Pathol 2008; 19(Suppl. 3) : 95]
- 9) Fukunaga M. Small cell carcinoma of the ovary, hypercalcemic type. Arkadi M. Rywlin International Pathology Slide Seminar Club : 3rd Symposium in Anatomic Pathology. Mexico City, June.
- 10) Fukunaga M. Agniomyofibroblastoma of the vulva. Arkadi M. Rywlin International Pathology Slide Seminar Club : 3rd Symposium in Anatomic Pathology. Mexico City, June.
- 11) 福永眞治. A clinicopathologic study of ovarian atypical endometriosis(AEM). 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 218]
- 12) 福永眞治. 軟部腫瘍診断における問題点. 第49回日本臨床細胞学会総会(春期大会). 東京, 6月. [日臨細胞会誌 2008; 47(Suppl. 1) : 120]
- 13) 原田 徹, 小池裕人, 野村浩一, 鈴木正章, 羽野 寛. Warthin 腫瘍に扁平上皮癌が合併した耳下腺腫瘍の一例. 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 324]
- 14) 池上雅博. 大腸癌の発育進展と大腸 sm 癌の治療. 第116回消化器がん治療研究会. 東京, 11月.
- 15) 山口 裕. 加令と腎病理. 第51回日本腎臓学会総会. 福岡, 5月. [日腎会誌 2008; 50(3) : 233]
- 16) 鷹橋浩幸. 前立腺癌診断と新改定グリソン分類(ISUP2005). 第96回日本泌尿器科学会総会. 横浜, 4月.
- 17) 鷹橋浩幸, 鹿 智恵, 中野雅貴, 古里征国, 羽野 寛. Allelic imbalance(AI)解析による前立腺微小癌と臨床癌の判別. 第97回日本病理学会総会. 金沢, 5月. [日病理会誌 2008; 97(1) : 143]
- 18) 酒田昭彦, 中山順今. 自然経過を辿り, 右心不全で急死した原発性肺高血圧症の一例. 第54回日本病理学会秋期特別総会. 松山, 11月. [日病理会誌 2008; 97(2) : 30]
- 19) 鷹橋浩幸. 前立腺病理診断とグリソン分類(ISUP2005)の運用方法. 第14回鹿児島前立腺研究会. 鹿児島, 9月.
- 20) Takahashi H, Nakano M, Furusato M, Hano H. Chromosomal deletions at 6q, 8p, and13q in the early development of prostate cancer. 98th Annual Meeting of the United States and Canadian Academy of Pathology. Boston, Mar. [Mod Pathol 2009; 22(Suppl. 1) : 195A]

#### IV. 著 書

- 1) 清水朋一(東女医大), 山口 裕. VIII. 移植 腎生検からみた拒絶反応の時代的変遷—Banff 分類の経緯と変遷および Banff07 分類について—. 御手洗哲也(埼玉医大総合医療センター), 東原英二(杏林大), 秋澤忠男(昭和大), 五十嵐隆(東京大), 金井好克(大阪大)編. Annual Review 腎臓. 東京 : 中外医学社, 2009. p.183-200.

#### V. その他

- 1) 河本輝敬<sup>1)</sup>, 宮田あかね<sup>1)</sup>, 岡村恵子<sup>1)</sup>, 青木陽子<sup>1)</sup>, 小野寺潤子<sup>1)</sup>, 今川信行<sup>1)</sup>, 大和竜夫<sup>1)</sup>, 木村英三<sup>1)</sup>, 山田隆之<sup>1)</sup>(佼成病院), 原田 徹. 子宮頸部より発生した嚢胞性子宮腺筋症の1例. 日産婦東京会誌 2008; 57(4) : 519-25.
- 2) Fujita A<sup>1)</sup>, Horita S<sup>1)</sup>, Sannomiya A<sup>1)</sup>, Fuchinoue S<sup>1)</sup>, Teraoka S<sup>1)</sup>(Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. An ABO-incompatible renal transplant patient who developed severe antibody-mediated vascular rejection 36 days after transplantation. Clin Transplant 2008; 22(Suppl. 19) : 47-9.
- 3) Isonishi S, Ogura A, Kiyokawa T, Suzuki M, Kunito S, Hirama M, Tachibana T, Ochiai K, Tanaka T. Alpha-fetoprotein(AFP)-producing

ovarian-tumor in an elderly woman. Int J Clin Oncol 2009; 14(1): 70-3.

4) 中村龍太, 小田原俊一, 内山 幹, 石井宏則, 相澤摩周, 佐藤憲一, 飯沼俊朗, 小井戸薫雄, 山根建樹, 石井隆幸, 小峯多雅, 藤瀬清隆, 田尻久雄. PPI 抵抗性胃噴門部潰瘍の1例. PPI 抵抗性胃噴門部潰瘍の1例. Prog Dig Endosc 2008; 72(2): 66-7.

5) Mori R, Nakajima M, Sakai H, Fukunaga M, Abe T. Pineal germinoma with a prominent epithelioid cell granuloma component. Neurol Med-Chir 2008; 48(12): 573-5.

## ウイルス学講座

教授: 近藤 一博 ウイルス学, 分子生物学

助教: 鎌田美乃里 ウイルス学, 血液学

助教: 嶋田 和也 ウイルス学, 分子生物学

### 教育・研究概要

#### I. 教育概要

##### 1. 医学科講義・実習

3年時学生の「ウイルスと感染」の講義を16コマ担当し, ウイルス学の基礎とウイルスと関係する疾患の基礎的な理解のための講義を行なった。実習は, 5コマの実習を行なった。講義・実習ともに, 将来, 医師としてウイルス感染症に対処できるための基礎を学習するとともに, 医学者として, 原因不明の疾患の研究, 新しい感染症の出現, ウイルスを利用した医療に対応できる基礎力をつけられる様に配慮した。

##### 2. 看護学科講義

ウイルス学の講義を6コマ担当した。

##### 3. 看護学校講義

慈恵看護専門学校においてウイルス学の講義を16コマ担当した。

#### II. 研究概要

講座の研究テーマは, ヘルペスウイルスが関係すると思われる慢性難治性疾患の研究や, ヘルペスウイルスベクターの開発など, 臨床応用を見据えた基礎研究を中心に行なっている。具体的な研究テーマは以下のとおりである。

##### 1. ヒトヘルペスウイルス6 (HHV-6) 感染と疲労との関係に関する研究

疲労の蓄積は様々な疾患の引き金になるだけでなく, 過労死を引き起こすこともまれではない。この様な障害を生じないためには, 「疲れたら休む」ことが最も良い解決法であり, 疲労を感じる感覚である「疲労感」は, 痛み, 発熱, 眠気と同様に生体を守る大切なシグナルである。ところが, 「疲労感」は比較的曖昧な感覚で, 報酬や達成感といった要素によって減殺されてしまう他, 人によって疲労を感じる度合いには大きな差がある。この様な問題を解決するためには, 疲労のメカニズムを解明して, 疲労を客観的に定量, 評価することが必要である。しかし, 現在のところ「疲労」が生じる機序や, 人が「疲労」を感じる機序など, 疲労のメカニズムに関しては, ほとんど判っていない。最近, 疲労の原因